

## 日本語の「テンス」について

謝 為 集

連日テレビのナイターを観戦し、やっと連敗から脱出した巨人はまた負け。長嶋さんのおっしゃる「メークドラマ」はこんなものかと、監督の言い訳を聞きたくて、朝さっそく新聞のスポーツ欄を読んだ。前日の試合についてこのように書かれている（朝日新聞97年6月8日付）。

目を覆いたくなるような悲惨さだった<sup>1</sup>。前日連敗を6で止めた<sup>2</sup>巨人だった<sup>3</sup>が、この日は打線が2安打に抑えられ、首位ヤクルトとのゲーム差は12。安打は三回に出た<sup>4</sup>後藤の二塁打と九回の松井の右前打のみ。長嶋監督も手の打ちようがない、という表情。「三回、あそこで先制しておくと主導権が握れた<sup>5</sup>。序盤のチャンスを逃すと、いつもた。12ゲーム差？しょうがない、それは」。逆転優勝へ、「あきらめない」の言葉を口にすることさえ、はばかれる内容だ。「メークドラマ」再現の道のりは、険しすぎる。

記事とは別に、文章などを書く時、日本人なら誰でも自由に活用語の基本形<sup>1</sup>を使ったり、過去・完了の意味に用いられる助動詞「た」を使ったりして、記述する物事の時制を表わすことができるが、それは外国人の日本語学

習者には難しい。上記の記事のテンスに注目してほしい。見やすくするため、勝手に活用語の基本形を使ったものを網掛けで、過去・完了の助動詞「た」を使っているところに下線を引いて表わしている。この記事は前日の試合についての報道なので、過去に起きたことの記述である。時に関するところは当然過去表現になっていると思ったら、基本形のほうが多く使われている。同じ内容を他の記者に執筆させても、多少テンスの処理に違いが出ると考えられるが、そんなに大差がないと思う。また、日本の読者もそれを読み、みな同じように意味の理解をしていたろう。しかし、それを外国人の日本語学習者に書かせると、きっとテンスの表現にいろいろな違いが見られよう。何と言っても、基本形はそんなにたくさんは使わないだろう。それはそれとして、筆者は中国での日本語教育に経験が長く、文法の説明に慣れているつもりでいるが、それでももし学生に、上記の記事のテンスについての説明を求められたら、簡単な解釈で片づけられないところが、少なくとも二箇所あると思う。それは「握れた<sup>5</sup>」と「内容だ」である。「主導権が握れた」は、実際「握れていない」にもかかわらず、過去表現を使われている。また、「内容だ」は、前日の様子だが、基本形である。

なぜ、一言、二言では説明できないかと、それは中国での日本語教育に問題があると思う。筆者は中国の某大学で教鞭を取りながら、学外の日本語教室や、ラジオ・テレビの日本語講座番組などにも出ている。これまで、日本や中国で編纂された日本語の教科書を数多く使用した経験がある。中国では日本語教育に使われているテキストのほとんどは、文法の説明は日本の学校文法を基準にしている。そのため、文法の説明になると、どれも似たような簡単なものしかのっていない。例えば、活用語の基本形については、たいてい「現在または将来のことを表わす」とか、助動詞「た」のついたものは「過去・完了を表わす」とか書かれている。それで、日本語の教育が中級、上級の段階になると、教師たちは文法の解釈にたいへん苦勞する。

次は中国の CCTV（中国中央テレビ）で日本語講座番組に使用された『標準日本語』（初級）<sup>2</sup>を調査の対象にし、日本の国語辞典などの解釈を参

照しながら、日本語のテンスについて考察してみたい。『標準日本語』（以下『標』と略す）を選んだ理由は中国では日本語の教科書の中で発行部数が最も多く、入門のテキストとして広く使われており、その上、日本語の本文や文法の説明の執筆は日本一流の言語学研究者の方々によるものであり、中国語訳もりっぱなものとしてよく知られているからである。

『標』（初級）には、活用語の基本形について次のように書かれている。

◇助動詞（「です」について）

“です”表示現在，也表示将来。用于将来时，表示讲到的内容是确实的事实，如“明日は7月1日です”。

(① P75)

◇動詞（「まだ…ません」について）

…这里的句型使用的是現在，將來的形式。

(① P108)

また，助動詞「た」について次のように説明されている。

◇助動詞（「でした／ではありませんでした」について）

在日语里，叙述过去的事物要用过去式。名词句“～です”的过去式是“～でした”，过去否定式是“～ではありませんでした”。

- ・今日は6月30日です。（現在）
- ・明日は7月1日です。（将来）
- ・昨日は6月29日でした。（過去）
- ・昨日は木曜日でした。（過去）
- ・昨日は休日ではありませんでした。（過去否定）
- ・昨日は金曜日ではありませんでした。（過去否定）

(① P75)

◇動詞（「もう…ました」について）

表示某件事或某个情况已经发生或完了。

- ・夏休みはもう始まりました。

(① P108)

上記の例文に、「昨日は休日ではありませんでした」のようなものが「過去否定」と定義され、出されているが、「アレ」と思われよう。それに似たような例文は筆者も編纂に参加した『日語』<sup>3</sup>のテキストや他の教科書にも出ている。『日語』編纂当時、「～ではありませんでした」のようなものは、「過去否定」かどうかについて、激しく論議したことがいまだ記憶に新しい。日本の学校文法に従う以上こんなふうに説明するほかはないと最終的に意見はまとまったものの、残念なことに後の文法の説明にそれ以上の解釈を入れてないことは、他の教科書と同様である。

というわけで、この間「あしたは月曜日だったっけ」という文を日本語教育の現場で活躍している若い教師たちに分析させたら、誰一人それほりっぱな日本語であると知っている者はいなかった。また、否文法的と思われる理由も全員一致、「あした」と「だった」のつながりがおかしいという。それは三省堂『新明解国語辞典』の「た」の見出し語のところにちゃんと出ていると見せても、どう理解していいか見解はまちまちである。中国でも日本語学習者に人気の高い辞書にのっているだけに、みんなおとなしくはなったが、今度は中国で使われている日本語のテキストが悪いと一斉に非難しはじめた。

「日本語のテキストが悪い」とは、どこがどう悪いか、調べる必要があると思って、『標』（初級）の活用語の基本形と「た」に関する説明などをもう少し拾って、「悪い」原因を探して見た。

次はその他の説明や例文などである。

#### ◇…時

在表示做某事的时间的“時”之前，有时也用动词句。这时，句中的动词应改为普通体。还要注意动词和“時”之间不加“の”。

食事の時，はしを使います。

↓

食事をする時，はしを使います。

- ・日本人は，食事を始める時，「いただきます。」と，言います。
- ・食事が終わった時，「ごちそうさまでした。」と，言います。

- ・田中さんは、山に登った時、写真を撮りました。

(②P36)

◇（連体形について）

1、…する（动词）／した（动词）＋名词

日语和汉语一样，当一个句子修饰名词时，修饰句放在被修饰名词之前。用汉语表示“在东京见到的人”，要在“在东京见到”和“人”之间加“的”，而日语里什么也不加，句子后面可以直接接名词

- ・「東京で会った」＋「人」→東京で会った人  
修饰句只能用“普通体”，不能用“礼貌体”。
- ・机の上に本があります。  
→机の上にある本
- ・あの人はテレビを見ています。  
→テレビを見ている人
- ・東京で友達に会いました。  
→東京で会った友達
- ・デパートで靴を買いました。  
→デパートで買った靴

……

修饰句也可以是否定形式

- ・わたしはあの人を知りません。  
→わたしが知らない人
- ・あの人は中国へ行ったことはありません。  
→中国へ行ったことがない人

2、…する（动词）／した（动词）＋名词＋は～です

- ・机の上にあるかばんは田中さんのです。
- ・去年中国へ行った人は山下さんのです。

3、これは…する（动词）／した（动词）＋名词＋です

- ・中国は長い歴史を持つ国です。

・これは去年東京で買ったカメラです。

4、…する（动词）／した（动词）＋名词＋が／を／に…

・中国を旅行する人がおおぜいいます。

・ここに先生が書いた本があります。

・わたしは昨日買った本を持って行きました。

(① P340)

「…時」の場合も、「…する／した＋名詞」の場合も、例文に動詞の基本形（「する」の形）を使ったものと、「た」を使ったものと比較しているかのように出されているが、残念ながら、その区別は一言も書かれていない。テキストの編纂者にとって、おそらく「た」の解釈のところで解決済みだと考えられているのかも知れないが、学習者にとっては、「基本形」を使ったものと「た」を使われているものとの違い、とくに文章に出ているものに対する理解が難しい。

たとえば、『標』の「た」についての説明にはこんなものもある。

◇「～」と書いた大きな紙／日本の進んだ科学技術

这种表达原是表示状态的句子。如“「～」と大きな紙に書いてある”（在大纸上写着“～”）“日本の科学技術は進んでいる”（日本的科学技术先进）。用于连体修饰时，可以把“…ている”“…である”改成“…た”。

本を持っている人→本を持った人

コートを着ている人→コートを着た人

掃除をしてある部屋→掃除をした部屋

(② P26)

「…時」，「連体形」の解釈のところと同じ，「状態を表わす」ところにも，基本形の「する」を使われた例文と，「た」で表わしたものを，対照的にたくさん出しているが，ここにも説明のようなものが一言もない。なぜ，「食事を始める時」，「食事が終わった時」なのか，どうして，「テレビを見ている人」，「東京で会った友達」なのか，状態表現の場合，なんで「ている」，「てある」のものは「た」の形で表現していいのか，その異同につい

て何一つ言及していない。

では、「た」の使い方について、日本の国語辞典では、どう解釈されているのであろう。日本でもよく使われていると思われる手許の辞書を二冊調べてみた。

一冊は『新明解国語辞典』（三省堂）。「た」についてはこう書かれている。

◇た（助動・特殊型）

①その事柄がすでに実現し、結果が現われているもの・認められる（見なす）という主体の判断を表わす。「きのう雨が降っー・新聞はもう読んだ・この辺は昔は寂しかったろう・私がやったら出来なかつー・今度会っー時に話そう・済まなかつーね〔＝本当に済まないね〕・あしたは月曜だったっけ〔＝月曜にまちがい無いね〕・帽子をかぶっー〔＝かぶっている〕人・絵にかいー〔＝かいてある〕ような景色」

②〔終助詞的に〕軽い命令を表わす。「さあ子供はあっちへ行っー・どいー、どいー」

もう一冊は『現代国語例解辞典』（小学館）。「た」について下記のように述べている。

◇た〔過去・完了の助動詞〕

...

①「昨夜国道で事故があつた」「若い頃はよく徹夜をした」のように、過去にあったこと、経験したことを表わす。②「社長は彼と決まつた」「探したら、すぐに見つかつた」のように作用・動作の完了と実現を表わす。③（終止形で）「そうだ、四時の約束だつた」「ちょっと待つた」のように、強意・軽い命令を表わす。④（連体形で）「澄んだ瞳」「絵に書いたモチ」のように、現在の状態を表わす。…ている。…てある。

『新明解国語辞典』（以下『新』と略す）の「①」には「た」の働きとして、「すでに実現」「結果が現われている」と指摘し、そして「認められる（見なす）という主体の判断」も強調している。「②」は終助詞的な働きであり、軽い命令を表わすものであると。

『現代国語例解辞典』(以下『現』と略す)では、①過去にあったこと、経験したこと。②作用・動作の完了と実現。③強意・軽い命令。④現在の状態。という四種類に分けられている。

両方の解釈を読み比べ、一見似たように書かれていると思えば、どこかが違う。『現』のほうがより細かく分類していて、いろんな文の説明に対応できるようであるが、『新』の「今度会った時に話そう」のような文はどれに分類していいかわからない。

「今度会った時」、それは「過去にあった」ものでも、「経験した」ことでもない。また「完了した」ことでも、「実現した」ものでもない。今後会うことを想定して、使った「た」である。こんなものは①～④のどれに当たるか、以上の説明ではわからない。とくに、外国人の日本語学習者にはこんな説明では誤解を招きかねない。

『標』(初級)には「た」または「た」に関する「～たばかり」や、「～たまま」のようなものを使った文は全部で370ぐらいあるが<sup>4</sup>、『新』の分類にしたがって分けると、すべて①に入るが、それは初級の勉強だから、②の使い方が出ないのは全然おかしくない。また『現』の分けかたで分析すると、③の「強意・軽い命令」に相当するものが見当たらない以外は、すべて①、②、④のどちらかに当てはまる。

調べているうちに、どこのテキストにも出ていると思われる、ある形の説明に悩んだ。

☆頂上は暑くなかったです。少し寒かったです。

(①P143)

「形容詞の過去表現」＋「です」の形、いわば形容詞の丁寧な表現の一種である。テキストや授業では、一応「～かったです」という決まったパターンとして、教えられているらしい。「暑くなかった」、「寒かった」などは過去に体験したことについての記述だから、「た」の使い方に、別に問題が起これないと思うが、「です」は「現在」と「将来」を表わすものであり、それは過去の事と結びついたりするのはどう考えても納得できない。学習者た



ちはテキストや教師の説明を完全に信じきっていて、疑問を持たずに、「～かったです」を、あるパターンとして覚え、また、それは授業にとっても簡単な説明で片づけられるから、すごく助かるが、実際の問題として、「た」や活用語の基本形の正しい使い方は学習者たちに教えていない。そのため、外国人の日本語学習者たちが、いざとなると誤解を招いてしまう。というのは彼らにとっては日本語のテンスはこんな形のものに違いない。

過 去	現 在	将 来
動詞・形容詞・形容動詞 など+「た」	動詞・形容詞などの 基本形	動詞・形容詞などの 基本形
動詞                    した	動詞                    する	動詞                    する
形容詞                かった	形容詞                い	形容詞                い
形容動詞            だった	形容動詞            だ	形容動詞            だ
他	他	他

『朝日新聞』日曜版の「日本語」欄を愛読している。小文を書いている最中に、「日本語を歩く」にはこんなものがのっている（朝日新聞97年6月22日付）。

降りる時に

佐々木瑞枝

横浜国立大

留学生センター教授

大学会館の前で、インドからの留学生アニルさんが、彼のチューター（相談相手）の木村君と話している。

「じゃ、電車を降りる時に電話をします」。ちょっと驚いた表情で木村君、「えっ、アニルさんは携帯電話持っているの?」「いいえ、持っていません。テレホンカードを持っています」

澄まして答えるアニルさんに、「でも、電車の中には公衆電話はないでしょ」と木村君。どうも話がかみ合っていないようだ。アニルさんは、

質問を解しかねたように、そばで聞いている私の顔を見つめた。

「アニルさん、『電車を降りる時』に電話をするのではなく、『電車を降りた時』に電話をするんですよね」と私が助け舟。木村君は「なーんだ。そういうことだったんですか。チューターを一年もやっているのに、まただ」。

勘違いしたのも、無理はない。「電車を降りる時に電話する」といえば、電車を「降りる前に」という意味だから、電車の中から電話することになり、それなら携帯電話だろうという、思考回路が働いたことになる。

アニルさんが「電車を降りた時電話します」と言えば、降りてから電話することになり、彼のテレホンカードも役に立つ。

「この使い方って結構難しいですよ。高等な文法っていうかー」と木村君。「そうね。ところで木村君、引っ越しをしたそうね。引っ越し時に大家さんにちゃんとあいさつした?」「ええ、ちゃんと。今度の大家さんは親切そうでよかったですよ」

私の質問を聞き間違えたのだろうか。彼の答えは、返事になっていない。彼が前に住んでいたアパートの大家さんともめたと聞いていたので、心配してたのだが、彼は引っ越した先の大家さんの話をしている。

「引っ越した時」だけでなく、「引っ越し時」も、あいさつしたのだろうか。

インド留学生のアニルさんが「降りる時」という表現を選んだ気持ちは私にはよくわかる。同じく日本語を外国語として学んだものであり、基礎文法から勉強したという簡単な理由から。「降りる時」を使ったのは「これからのこと」だから、「将来」を表わす表現として「降りる」を取るのはあたりまえのこと。それは、外国人向けの日本語テキストや、『現』のような一部の辞書などではみんなそういうふうに書かれている。むしろ、「降りた時」のほうが、外国人の留学生には難しい。「降りた時」の「た」は明らかに、

過去のことでもなく、経験したことでもない。「実現」という場面を想定した「た」の假定表現「たら」のニュアンスが入った使い方である。外国人の留学生が「降りる時」と「降りた時」に困るのは言うまでもないが、上記の日本人である木村君の「引っ越す時」と「引っ越した時」の例が面白い。それは、「引っ越す時」と「引っ越したとき」の使い分けが分からないというより、むしろ木村君の勘違いと言ったほうが適当であろう。

活用語の基本形を使った表現と「た」を使った表現といたいどこが違うのか、もう少し分析する必要があると思う。

『新』の「た」についての説明は意味が深い。「その事柄がすでに実現し、結果が現われているもの・認められる（見なす）という主体の判断を表わす」。

『新』の説明によれば、「た」が使われているものには単なる「事柄が実現、結果の現われ」だけではなく、「認められる（見なす）という主体の判断」も入っているのである。つまり、事柄の実現や結果であることを話者がそうであると認める（見なす）要素が文に含まれている。そうであれば、「暑くなかったです」、「寒かったです」のような文の説明がつく。

「暑くなかったです」を例に分析してみよう。「た」は過ぎ去ったことを表わすと同時に、話し手の自分の見解であるという意味もそこに入っている。つまり、他人がどう思うかは別として、「暑くない」と話者は思う。あとは「～かった」と「です」との関係。「です」の働きについてもう少し調べる必要があると思う。

『新』の「です」のところにはこう書かれてある。

◇です（助動・特殊型）

①〔体言および体言相当のものに接続して〕断定の意を表わす。「だ」の丁寧形。「私は田中一・これはだれののでしょうか・いい話でした・会は1時から一」

②〔未然形＋推量の助動詞「う」は、活用語（いわゆる形容動詞や形動型助動詞を除く）の終止形に接続して〕推量の意を表わす。「だろう」の丁寧形。「すぐ来るでしょう・いいでしょう・痛かったでしょう」③〔終止形は

形容詞・助動詞（ない・たい・らしい）の終止形に接続して〕表現に丁寧さを添える。「うれしいー・やりたいー」④〔文節の切れ目につけて〕もったいをつけるような感じを表わす。「しかしーな・とにかくーね・君がーよ」

『現』は「です」についての説明は下記のようなものである。

◇です〔判断の助動詞〕

……

名詞および、活用語の連体形に準体助詞「の」のついたもの、形容詞・形容動詞活用型の助動詞の語幹につく。ただし、未然形「でしょ（う）」は、動詞・形容詞・助動詞の連体形にも直接つく。①「金メダルを取るのが目標です」「さぞや悲しいでしょう」のように、丁寧な断定を表わす。②「ところがですね、そう簡単じゃないんです」のように、間投助詞的に用いて語調を整える。

……(4)現在では、形容詞の連体形<sup>5</sup>に直接つく「大きいです」「美しいです」の形も広く使われる。過去形は「大きいでした」ではなく「大きかったです」がふつう。

『新』では、「です」の使い方として4種類をあげているが、基本的な働きは「だ」の丁寧な表現であり、判断の意を表わすと解釈している。

一方『現』では、言い方は多少違うが、意味はさほど変わらないと見てよいだろう。つまり、「です」は判断の意味を表わし、「だ」の丁寧な表現である。

『新』にも『現』にも「形容詞＋です」についての説明があるが、また例文として「いいでしょう」、「痛かったでしょう」、「大きいです」、「美しいです」、「大きかったです」などを出している。

これらの説明を見ても分かるように、「です」は単なる丁寧な「断定」であり、いま「現在」の判断なのか、これから「将来」の判断なのかというニュアンスがない。ちょうど、『新』の例文に「いい話でした」という「でした」を使ったものがあり、その判断はもちろんいままでにあった「話」を「当時すばらしいと思った」と解釈していいが、いまになって、「考えが変わった」

というニュアンスはどう読んでも出てこない。明らかに「でした」の働きは少なくとも現在まで続いている。

ここまでくると、結論として、まず「です」は、現在または将来のことを表わし、「でした」は過去のことを表わすとかの説明には問題があると言えよう。それでは「です」と「でした」はどう違うかと、『新』の「です」と「た」の解釈に従えば、次のようになる。

「です」は「だ」の丁寧な言い方であり、断定の意を表わし、「そうである」と思われる。だから「私は田中です」，「会は1時からです」，「金メダルを取るのが目標です」などが使われている。また，形容詞の「終止形」についたもの，「大きいです」，「美しいです」のような例もその解釈で説明がつく。そうであれば，「いい話でした」の「でした」は何なのであろう。「でした」は断定の「です」の活用したものであり，言い換えれば，単なる断定ではなく，他のニュアンスも含まれた表現である。ここの「た」の働きについては，『現』の「た」に関する説明の③「強意」を取りたい。「いい話でした」とは，話し手の感動を訴えたもので，「感嘆」のニュアンスがあり，聞き手にそれを伝えようという気持ちが文から読み取れよう。

それでは，『現』の「大きかったです」や，『標』に出ている「暑くなかったです」，「寒かったです」のような使い方について，どう説明するかと，次のように見てよかろう。「形容詞＋た」の形は話者が過ぎ去ったことをああいうふうに見なして，思うという表現であり，それにつく「です」は単なる「断定」であると。

「です」，「でした」についての考察はこんな形となったが，助動詞「です」に関する使い方とはいえ，それだけでも，活用語である形容詞（い＋です），形容動詞（語尾の活用は「だ」と「です」を直接借りている），助動詞の「だ」，「です」においては，「過去・現在・将来」という解釈が不十分だと考えられよう。それでは，残りの活用語——動詞の場合はいかがであろう。

動詞に「た」がついて，もし『現』の解釈のように「過去にあったこと」

とか、「経験したこと」と見れば、一部の文の説明にはなるが、上記の「電車を降りた時」のようなものを如何に理解するかが問題である。「電車を降りる時」を使ったアニルさんが自分のこれからの行動を想像して、「電車に乗って、そして降りる」と、将来のことを表わそうとしていたろう。一方、そんな表現は日本人には通じない。「電車を降りる時」は「電車を降りる前」になり、「電話をする」なら、電車に乗っているから当然携帯電話を連想してしまう。アニルさんの言いたいことは正確に表現すれば「降りた時」となり、その「た」は起きてない事柄に対する想像であり、一種の仮定表現である。つまり、「た」には「たら」に似たような「仮定」の働きがあり、これから起きることにも使えるのである。

そうであれば、冒頭の、野球の試合の報道に出た、説明しにくい文についても、なんとかして辻褄が合うように解釈できる。

「三回、あそこで先制しておく主導権が握れた」のところは、「先制しておく」という仮定表現が出ているので、「握れた」は間違いなく監督さんの想像である。「握れた」の「た」は「降りた時」の「た」の働きとよく似ていると思う。

また、「…の言葉を口にすることさえ、はばかれる内容だ」の「内容だ」の「だ」は、「です」と同じく、単なる記者本人の判断である。「過去・現在・将来」の「時」とは、まったく関係のないものである。

以上の分析で、「一件落着」のように見えるが、活用語の基本形や「た」の使い方について、なんとなく、ものたりない気がする。いったい、活用語の基本形また「た」の使い方についてどう考えればよいだろう。

筆者も日本語のいろはからスタートし、基礎文法を習った一人であり、教科書などを勉強しながら、自分なりに日本語の仕組みを探究してきた。下に日本語の「テンス」について自己流の理解を述べてみたい。

まず、辞書などに載っている活用語の「基本形」について、それは、名詞などに似たような働きをするものと考えている。つまり、「あるイメージを表わす」のである。動詞、形容詞、形容動詞などは語尾の活用をしていない

場合は、単独でまたは前の内容といっしょにある概念を作るのである。やはり、冒頭の記事を例にして考えてみよう。

### 動詞の場合

目を覆いたく<sup>なる</sup>

手の打ちようがない、と<sup>いう</sup>表情

先制して<sup>おく</sup>と

チャンスを<sup>逃す</sup>と

言葉を口にする<sup>こと</sup>さえ

<sup>は</sup>ばかられる内容

険し<sup>すぎる</sup>

### 形容詞の場合

手の打ちようがない<sup>い</sup>

しょうがない<sup>い</sup>

### 助動詞の場合

「あきらめ<sup>ない</sup>」の言葉

はばかられる内容<sup>だ</sup>

ここに出た基本形はいずれもイメージ作りの働きをもっており、読者にそういった印象を与えようとしている。そのため、活用語が他のものの働きを借りずに、基本形の形となって使われることは、その活用語、またはその前のものといっしょに、ある物事や現象が現実のものとして現われているか起きているかなど問題にせず、ただのイメージであることを表わしていると考えてよかろう。例の「電車を降りる時」も「引っ越す時」もそういった類である。

また、活用語は「た」のような、いろいろなものの働きを借りてはじめて様々の生きた記述になるといえよう。

本文は日本語の「テンス」の考察が目的なので、「た」の働きについても自分なりの見解を述べよう。『新』や『現』の例文を拝借して、また冒頭の記事などといっしょに分析してみたい。

「た」は活用語（の連用形）につき、①過去に起きたこと、前にあった感想に対する記述を表わす

きのう雨が降った

新聞はもう読んだ

この辺は昔は寂しかったらう

昨夜国道で事故があった

若い頃はよく徹夜をした

連敗を6で止めた

安打は三回に出た…

②（事柄が起きるといふ）想定を表わす

今度会った時に話そう

電車を降りた時に電話をします

あそこで先制しておくと主導権が握れた

③強調の意味を表わす

済まなかったね

あしたは月曜だったっけ

そうだ、四時の約束だった

\*目を覆いたくなるような悲惨さだった

\*連敗を6で止めた巨人だったが

「\*」のついた文をここに入れる理由は「だった」の表現は「だ」で表わしても意味がかわらないからである。

④軽い命令を表わす

さあ子供はあっちへ行った

どいた、どいた

ちよっと待った

⑤目の前にある状態を表わす（＝～ている、～である）<sup>6</sup>。

帽子をかぶった人

絵にかいたような景色



澄んだ瞳

絵に書いたモチ

日本語のテンスとなると、これまで多くの言語学者たちがあらゆる角度から研究され、日本語研究に貴重な資料を残してくれた。日本語を勉強するため、後に日本語教師で「飯を食う」ため、それらの資料をたくさん読ませていただいたが、いつも思うことは一つ、研究のためのものではなく、私のような者には、勉強のためのものが欲しい。つまり、簡単で、覚えやすいものがあって欲しかった。そのため、いかに分かりやすく学習者に日本語文法を教えるかを長年にわたり自分の研究課題にしてきた。本論を書く際、努めて初心者に難しい言い方を避け、また、日本の学校文法の説明や日本語研究の専門書などとはちょっと違った角度から、自分なりの理解をまとめてみた。外国人の日本語学習者たちに何かご参考になるようなところがあればと思って、敢えて発表し、批評をいただきたい。

参考文献

『新明解国語辞典』第3版三省堂

『現代国語例解辞典』第2版小学館

『標準日本語』光村出版・人民教育出版社

『朝日新聞』

『アスペクト・テンス体系とテキスト』(1995) 工藤真由美

他

注)

- 1 辞書などでは「連体形」、または「終止形」と呼んでいるが、本論では「基本形」と呼ぶ。
- 2 『標準日本語』は、中国中央テレビの日本語講座用テキスト。中日共同編纂、光村図書・人民教育出版社。「初級」は2冊ある。
- 3 『日語』中国廣播電視出版社。中国北京市放送局のラジオ日本語講座用テキスト。
- 4 「た」の使い方を考察するため、筆者が『標』の本文と閲読短文から集めた例文数。

- 5 『現』では「連体形」とされているが、他の辞書や文法の本などでは「終止形」と扱っている。
- 6 「～ている」「～てある」も「基本形」の形、「イメージ」であり、ある「概念」である。そのため「～た」と置き換えできる。